

固液混相流に関する考察

京都大学工学部 正員 工博 岩佐義朗
大成建設 “ 工務の技術部長

1. まえがき 固液混相流に関する理論的解析は、従来から、志村氏¹⁾、日野氏²⁾などにより試みられてきた。本研究では、固相、液相の区別をば、より詳しく、これらの相対運動を考察して、連続式、運動式、エネルギー式を導いた。さらに、カルマン定数、また摩擦係数の変化に就き考察を加えた。

2. 基礎方程式 兩相流を取り扱うものとして、座標系に直交座標系 (x, y, z) を用いる。x を主軸方向、y を反重力方向にとる。

単相流と混相流の関係をみるために、対比させて基礎方程式を示す。ある相 s を考えると、その濃度を c_s とすると、混相流中の各相の方程式は、濃度をかけ込むもので示される。テソル表示で示すと、単相流と、混相流中の相 s の関係はつぎのようになる。ただし、固相のような場合も、つぎに示すように、ニュートン流体として表わされることを仮定する。

	単 相 流	混相流中のある1相 s
連続式	$\frac{\partial \rho u_i}{\partial x_i} = 0$	$\rho_s \frac{\partial c_s u_i}{\partial x_i} = 0$
運動方程式	$\rho u_k \frac{\partial u_i}{\partial x_k} = -\frac{\partial p}{\partial x_i} + \mu \nabla^2 u_i + F_i$	$\rho_s \frac{\partial}{\partial x_k} (c_s u_i u_k) = -\frac{\partial}{\partial x_i} (c_s p) + \mu_s c_s \nabla^2 u_i + c_s F_i$
エネルギー式	$\rho u_i u_k \frac{\partial u_i}{\partial x_k} = -u_i \frac{\partial p}{\partial x_i} + \mu u_i \nabla^2 u_i + u_i F_i$	$\frac{1}{2} \rho_s \frac{\partial}{\partial x_k} (c_s u_i u_i u_k) = -\frac{\partial}{\partial x_i} (c_s u_i p) + \frac{1}{2} \mu_s c_s \frac{\partial^2 u_i u_i}{\partial x_j \partial x_j} - \mu_s c_s \left(\frac{\partial u_i}{\partial x_j} \right) \left(\frac{\partial u_i}{\partial x_j} \right) - \rho_s c_s u_i F_i$

u_i, F_i は、 s 相の速度成分、外力成分である。

($i = 1, 2, 3$)

ρ, μ は 密度、粘性係数である。

($k = 1, 2, 3$)

i, k の 1, 2, 3 は x, y, z に対応する。

固液2相流では、各成分の関係はつぎのようになる。

	液 相	固 相
ρ_s	ρ_0	$\rho_0 \delta$
c_s	$(1 - \delta)$	δ
u_i	$U + u'$	$U_p + u'_p$
u_2	v'	v'_p
u_3	w'	w'_p
μ_s	μ	μ_0

また、 $\begin{cases} C = \bar{C} + C' \\ \bar{p} = \rho_0 q(h - y) \end{cases}$, $F_1 = F_3 = 0$, $F_2 = -g$
(q は重力加速度)

これらの関係に加えて、速度平均量は x, z 方向に独立である。したがって、各式を平均して、流れ運動に対する基礎方程式はつぎのようになる。

- ① 連続式 各相の質量が保存されることと、本流での境界条件より、 v_0 は液降速度とすると、
- $$\left. \begin{aligned} \text{液相に} & \quad \overline{C'V} = 0 \\ \text{固相に} & \quad \overline{C'V_p} - \bar{C}v_0 = 0 \end{aligned} \right\} \quad (1)$$

- ② 運動方程式 2相間の相互作用を考慮して、各相について、運動方程式も、導くことができる。主軸方向のみについて示す。

$$\left. \begin{aligned} \frac{d}{dy} \{ (1-\bar{\epsilon}) \bar{u} \bar{w} - \bar{c} \bar{u} \bar{w} \} &= \nu (1-\alpha \bar{c}) \nabla^2 \bar{u} \\ \frac{d}{dy} \{ \bar{\epsilon} \bar{u} \bar{v} \bar{v} + \bar{c} \bar{u} \bar{v} \bar{v} - \delta \bar{v}_0 \bar{c} \bar{u} \bar{v} \} &= \nu \bar{c} \nabla^2 \bar{u} \end{aligned} \right\} \quad (2)$$

==に、 α は、液相が単相流の場合と同様に運動する部分を補正する係数で、 $0 \leq \alpha$ 。
 ν は、固相の存在による粘性力を示す係数である。固相 それ自身はせん断変形は生じないが、固相の存在により、固相と液相のあったところの相対運動が生じ、速度勾配が生じ、固相の周りの液相のせん断変形による粘性力と、固相同志の衝突によるまじり力を示すために導入された係数で、固相の粘性係数 ϵ に置き換える。壁面と、境界条件を考慮して、積分すると、

$$(1 - \epsilon/\alpha) u_*^2 = \nu (1 - \alpha \bar{c}) \frac{d\bar{u}}{dy} + \nu \bar{c} \frac{d\bar{u}}{dy} - \{ (1-\bar{\epsilon}) \bar{u} \bar{w} - \bar{c} \bar{u} \bar{w} + \bar{\epsilon} \bar{u} \bar{v} \bar{v} + \bar{c} \bar{u} \bar{v} \bar{v} - \delta \bar{v}_0 \bar{c} \bar{u} \bar{v} \} \quad (3)$$

ただし $u_*^2 = [\nu (1 - \alpha \bar{c}) d\bar{u}/dy]_{y=0} + [\nu \bar{c} d\bar{u}/dy]_{y=0}$, h : 水深

③ エネルギー式 液相、固相の各方向式を加え合わせて、平均すると、次式が混相流エネルギー式から得られる。

$$\begin{aligned} u_*^2 \frac{d\bar{u}}{dy} &= \frac{1}{2} \frac{d}{dy} [(1-\bar{\epsilon}) \bar{u} \bar{v} \bar{v} + \bar{\epsilon} \bar{u} \bar{v} \bar{v} - \delta \bar{c} \bar{v}_0 \bar{v} \bar{v} - \bar{c} \bar{u} \bar{v} \bar{v} + \bar{c} \bar{u} \bar{v} \bar{v} - \delta \bar{v}_0 \bar{c} \bar{u} \bar{v}] \\ &+ \frac{1}{2} \frac{d}{dy} [\bar{p} \bar{u} + \bar{c} (\bar{p} \bar{u} - \bar{p} \bar{u}) + (\bar{c} \bar{p} \bar{u} - \bar{c} \bar{p} \bar{u})] \\ &+ \nu (1 - \alpha \bar{c}) [(\frac{d\bar{u}}{dy})^2 - \frac{1}{2} \frac{d^2}{dy^2} \bar{u}^2 + \frac{(\partial u_i}{\partial x_j})(\frac{\partial u_i}{\partial x_j})] \\ &+ \nu \bar{c} [(\frac{d\bar{u}}{dy})^2 - \frac{1}{2} \frac{d^2}{dy^2} \bar{u}^2 + \frac{(\partial u_i}{\partial x_j})(\frac{\partial u_i}{\partial x_j})] + \rho_0 (1-\bar{\epsilon}) \bar{c} \bar{v}_0 \bar{g} \\ &+ \frac{1}{2} \bar{c}' [\nu \bar{p} \bar{v} \bar{v} - \alpha \nu \nabla^2 \bar{v} \bar{v}] + \bar{c}' [\nu \bar{p} (\frac{\partial u_i}{\partial x_j})(\frac{\partial u_i}{\partial x_j}) - \alpha \nu (\frac{\partial u_i}{\partial x_j})(\frac{\partial u_i}{\partial x_j})] \\ &+ \nu \bar{p} \bar{c}' \frac{d\bar{u}}{dy} - \alpha \nu \bar{u} \bar{c}' \frac{d\bar{u}}{dy} \end{aligned} \quad (4)$$

④ 速度分布式 混合距離理論を用いて、 $-\bar{u} \bar{w} = \ell_*^2 (\frac{d\bar{u}}{dy})^2$, $-\bar{u} \bar{v} \bar{v} = \ell_*^2 (\frac{d\bar{u}}{dy})^2$

$\bar{u} \bar{v} = \beta_0 \bar{u}$, $\bar{c} \bar{u} \bar{v} = \alpha_1 \bar{c} \bar{u} \bar{v} = \alpha_1 \bar{c} \bar{v}_0$ α 関係から、(3)式は、

$$(1 - \epsilon/\alpha) u_*^2 = \{ (1-\bar{\epsilon}) + \beta_0 \ell_*/\ell_* \} \ell_*^2 (\frac{d\bar{u}}{dy})^2$$

$$\frac{d\bar{u}}{dy} = \frac{u_*}{K_m \bar{g}} \sqrt{\frac{\{ (1-\bar{\epsilon}) + \beta_0 \ell_*/\ell_* \} \ell_*^2}{1 - \alpha_1 \bar{c} \bar{v} (\bar{v}_0/\bar{u})^2}} \quad (5)$$

$\bar{v}_0 \ll u_*$, $\bar{c} \ll 1$ より $\alpha_1 \bar{c} \bar{v} (\bar{v}_0/\bar{u})^2 \approx 1$ としてよい。これは速度分布を示す式

3. カルマ定数に関する考察

Lauferの乱流実験結果から、平均値からの乱流エネルギー生産率は、乱流による熱伝達に費やされることから、(4)式において、 $\nu [(1-\bar{\epsilon}) + \nu \bar{p} \bar{c}] = \nu (1 + B \bar{c})$ であり、また $\bar{c}'$ による項は $\bar{c}$ による項に比較して小さいと仮定すると、単相流では、(5)式と(3)式より

$$\frac{u_*^2}{K_m} \ln(\frac{h}{\delta} - 1) = \int_{\delta}^h \nu (\frac{\partial u_i}{\partial x_j})(\frac{\partial u_i}{\partial x_j}) dy \quad \text{であり、混相流では}$$

$$\frac{u_*^2}{K_m} \ln(\frac{h}{\delta} - 1) = \frac{u_*^2}{K_m} \ln(\frac{h}{\delta} - 1) (1 + B \bar{c}) + (\delta - 1) \bar{c} \bar{v}_0 \bar{g} (h - \delta) \quad (6)$$

したがって

$$\frac{1}{K_m} = \frac{1}{K_m} (1 + B \bar{c}) + \frac{(\delta - 1) \bar{c} \bar{v}_0 \bar{g} (h - \delta)}{u_*^2 \ln(\frac{h}{\delta} - 1)} \quad (7)$$

4. まじり抵抗係数に関する考察

$$\text{断面平均流速 } \bar{u}_0 \text{ を固定すると、} \quad f_m = f_0 (1 + B \bar{c}) + \frac{16 \sqrt{K_m} (\delta - 1) \bar{c} \bar{v}_0 (h - \delta) \bar{g}}{\sqrt{f_0} \bar{u}_0^2 \ln(\frac{h}{\delta} - 1)} \quad (8)$$

参考文献: 2) 日野幹雄; 土木学会論文誌 92号 (昭 38.4) 1), 3) は同じく 2) を参照。